2010年（平成22年）
第27号
（3月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

第２７回庭野平和賞「エラ・ラメシュ・バット女史」に　シンポジウムは５月１４日（金）

財団法人庭野平和財団（総裁：庭野日鑛、理事長：庭野欽司郎）は、第２７回 庭野平和賞をインドの「自営女性労働者協会」（Self-Employed Women’s Association: SEWA）創始者、エラ・ラメシュ・バット女史（Ms. Ela Ramesh Bhatt）に贈ることを発表した。

エラ・ラメシュ・バット女史は１９３３年に生まれ、世界で最も目覚しい活動をした草の根運動の先駆者。女史は、インドの最も貧しく抑圧された女性労働者の生活改善に生涯を捧げ、７２年に自営女性労働者協会（SEWA）という労働組合を設立、現在組合員は１２０万人に達している。７４年にはSEWA 銀行を立ち上げ、今では３００万人の女性たちが利用している。

２月２４日（水）、京都教会において、京都の宗教記者会へ受賞者決定を発表した。

贈呈式は５月１３日（木）、東京で行われ、シンポジウムが１４日（金）に京都教会で開催される。今回のシンポジウムは受賞者と対話できる機会にしていこうと予定されている。

庭野平和賞は、庭野日敬名誉総裁の精神と行動を尊重し、宗教協力の理念と活動の輪を広げ、多くの同志の輩出を心から願うと同時に、現にそのような活動をしている人が多数存在しているという認識に立って、そのような人材を表彰し、励まし、更にその業績が多くの人々を啓発することを祈って、設定された。

これまで、日本を含む世界の２０の国と地域から、平和に貢献されている方々が受賞され、京都教会でシンポジウムが開催されてきた。毎回、受賞される方々に敬意を表すると共に、我々自身、宗教精神に基づいて、宗教協力を促進し、世界平和につながる取り組みを推進していくことが大切であると自覚させられるものでもある。

一食平和基金平成２２年次運営計画

立正佼成会一食（いちじき）平和基金運営委員会はこのほど、平成２２年次の運営計画を発表した。本年次の予算総額は「貧困の削減」「難民支援」「教育・育成」など９分野を対象に３億４００８万１千円。「ゆめポッケ」をはじめとする平和活動、「アフリカへ毛布をおくる運動」「農業・環境・地域開発事業」など国連やＮＧＯ（非政府機関）と協働して進めるさまざまな活動に充てられる。主に「貧困の削減」では、庭野平和財団に委託助成して貧困者の自立や生活向上を支援する「南アジアプログラム」をはじめ、深刻な食糧不足に陥っている地域への食料援助を行うＷＦＰ（国連世界食糧計画）への助成、「アフリカへ毛布をおくる運動」など５事業に１億４５４１万６千円を計上。特定非営利活動法人ジェンと協働で進める「人道緊急・復興支援事業」や「ゆめポッケ」など５事業に７５８６万円が充てられることになった。

時事刻々

平和の祭典、バンクーバー・オリンピックが幕を閉じ、パラリンピックが始まった。４年に一度の大舞台に各国のアスリートたちの競技に世界中の人たちが熱狂し、感動したことだろう。

バンクーバー大会のマークを見て、「京」の文字に似ていると思った人も多いことだろう。我が家でも話題になっていた。

今回の大会では、オリンピックとパラリンピックを同じステッカーを使ってＰＲしていた。最高の記録を競うオリンピックも素晴らしいが、ハンデを持った人たちが、それを克服する姿にも心が打たれる。

一九八六年に公開された映画「白い恋人たち」はフランス・グルノーブルで行われた記録映画だ。バックに流れるフランシス・レイの挿入曲に魅了された記憶がある。

北海道土産で有名な「白い恋人」はこの映画から生まれたという。感動を形に！新しい銘品の誕生を期待したい。

２００９年に京都教会は発足５０周年を迎えました。２０１０年私たちは新たな一歩を踏み出します。

ブロック！地球温暖化　家庭での実践

１９９７年に京都国際会館において開催された、第３回気候変動枠組条約締約国会議（ＣＯＰ３）において決議されたいわゆる京都議定書からはや１３年、昨年末、コペンハーゲンにおいて第１５回（ＣＯＰ１５）が開催され、本会からは中村教会長も出席し、宗教者の立場で温暖化防止を訴えかけた。

ＣＯＰ１５では、各国の思惑が錯綜し、結論が先送りになった。しかし、やはりこの地球を未来の子供たちに安心して引継いでいくためには地球規模での取り組みが必要であることは間違いない。

そして私たち一人ひとりの取り組みが、もっとも重要であることも忘れてはいけない。誰かが取り組めば良いとどこか他人任せになっている自分を見つめ、私たちの取り組みを提案したい。

本会の機関誌「校成」の３月号で庭野会長は『少欲足知』の実践を説いた。大量生産・大量消費の現在の我々の生活を見直し、足るを知ることにより心豊かに生きる。

その実践として下記をお勧めたい。

①一週間に一回家族で二時間の団欒をしてみよう
②携帯電話の充電器をコンセントから外す。
③冷蔵庫内に室温保存で良い物をいれない。
④冷蔵庫にしまいっ放しの食品をなくす。
⑤エアコンのフィルター掃除は月に一回しよう。
⑥シーズンオフのエアコンはコンセントから抜く。
⑦家電製品のコンセントはこまめに抜こう。
⑧お湯は使用する度に沸かそう（ポットを一日中、保温状態にしないこと）。
⑨お風呂のシャワーを一人一分短縮する。
⑩エアコンの設定温度は適正にする。

ＡＲＭＳ　ＤＯＷＮ展開中！！

前回、案内した「ＡＲＭＳ　ＤＯＷＮ」の署名活動が、京都教会においてもスタート。教会法座席に署名用紙レターケースを設置。各自、持ち帰り、署名を勧めている。

なお、同キャンペーンのホームページも、是非ご覧いただきたい。http://www.armsdown.org/jp/

私の夢　私の希望

京都教会では、会員一人ひとりが今年一年間の夢や希望を仏さまに誓願する取り組みが行われている。２月３日の節分、４日立春、１５日成道会のたびに会員が一年の心構えを定めるために実施された試みだ。

記入用紙は教会法座席に設置されている。

他教団活動紹介　（中外日報３月１１日より）

●超宗派若手７０人が集う　ＢＢＡ関西が始動

急速な変化を遂げる現代社会と、硬直化が指摘される教団組織のはざまで悩みや葛藤を抱く僧侶たち。「自らの『僧侶性』とは何か」ー。将来に向けた“次の一歩”を踏み出すきっかけをつかもうと若手僧侶が大阪に集い、「次代の僧侶の可能性」を語り合った。

語り合いの場は、９日に大阪天王寺区の浄土宗應典院で開かれた超宗派若手僧侶によるワークショップ「ボーズ・ビー・アンビシャス関西」（ＢＢＡ関西）。関西を中心に全国から約７０人が参加した。

ＢＢＡ関西は東京都港区の曹洞宗青松寺で開かれている「ボーズ・ビー・アンビシャス（ＢＢＡ）！！」の関西版。当日は趣旨説明の後「２０年後、あなたはお坊さん、してますか？」をテーマにグループに分かれて本音をぶつけ合った。話題は「檀信徒には通じても一般には通じない」僧侶の言葉や、自殺問題へのかかわり方、葬儀の改革など多岐にわたった。自らの「仏教に出合えた喜びを伝えたい」という意見もあった。

私たちkinki.元気　～今月のメッセージより～

梅の香がほのかに香る時節となりました。もうそこまで春の足音が聞こえて参ります。

2006年の立正佼成会開祖生誕100年を記念して、近畿ブロックホームページ「KINKI. 元気！」を立ち上げ、ブロック各教会の教会長、編集委員の皆様、そしてホームページのいろはからご教導頂いたプロップステーションの竹中なみ（ナミねぇ）さん、菊田能成さんら多くの皆さんのご協力を頂き、今日までトップ画面（表紙）の運営をはかって参りましたが、来月からトップ画面を固定化し、各教会のブログページに直にアクセスできるようにリニューアルさせて頂くことになりました。

これからも今日までの体験を礎に、立正佼成会近畿ブロック各教会が、何をめざし、何を実践していくかを多くの皆様に発信して参る所存です。

HPにアクセスして頂いた皆様や関係者の皆様には、衷心より厚く御礼申し上げますとともに、今後とも「KINKI. 元気！」をよろしくお願い申し上げます。

文化活動

京都教会で現在実施されている文化活動に、東山普門太鼓がある。

平成３年２月１０日、当時の青嶋教会長が京都の地で法華経の広宣流布を願い、青少年育成の一環として東山普門太鼓が設立された。

指導者として矢野氏を招き、山田部長を中心に青年部を中心に出発、現在は青年各部選りすぐりのメンバーが１０名。屋台囃子・飛竜三段返し等１０数曲のレパートリーと新曲にも挑戦中。

教会の主要行事での演奏、祇園祭の宵宮などに出演しております。京都の他のグループとも交流を図（特に、京北大杉太鼓さん）っている。部員を時募集。

佼成のことば（行法ガイドブックより）

●念じる

「念じる」とは、目に見えない存在(仏)に対して絶対の信を寄せることです。絶対の存在を信じることは、信仰者にとって信仰の出発点であり、最終点であり、また信仰そのものです。仏さまを念じるということは、人と仏、人と法とが一体になるという意味です。本来、仏と私たちは一体なのですが、我の強い私たちは自己中心的にものごとをとらえ、「自分は自分、仏は仏」と相対的に考えがちです。そうした我を取り去り、無になって仏さまに帰依する。それが仏と一体になることです。

私たちは苦しい現象が出た時とか、願望を成就したい時に仏さまを念じます。しかし、その問題をとおして仏さまが自分に何を教えてくださっているのか、どこを改め、どう行動に移さなければならないのかを自分の心に静かに問いかけ、内省してみることです。そして、「念じる」ことをとおして小我を捨て、大我に生きる。―つまり、仏さまに絶対の信を寄せることにより、仏と一体である自分本来の姿を自覚することができるようになります。自分だけの願いにとどまらず、仏さまの手足となって人類を救済し世界を平和にするという大きな願いのもとに、足元の実践に励む。「念じる」ことによって、そのことが自覚できるようになってくるのです。

仏教を生活に生かす　「日常生活の中の仏さまの教え」

《平和をつくりだす人・・・宗教協力》

庭野開祖は「世界平和のため、宗教協力のためならば、どこへでも行きますよ」と、おっしゃっていました。そのお言葉通り、後半生を平和活動に捧げられました。1979 年、イランでアメリカ大使館の人質事件が起きた際には、ご自分を人質の身代わりにという覚悟で、現地に入られました。また、1994 年の WCRP イタリア大会へは、88 歳の高齢を押して出席されました。庭野開祖はなぜ、何のために、世界の平和に心血を注がれたのでしょうか。もちろん、紛争を解決するため、世界の平和を実現するためです。

そして、庭野開祖が命をかけられたその源には、どんな時も、常に仏さまの願いを実現する決意、仏性礼拝行を実践するという決意があったのだと思うのです。**常不軽菩薩の礼拝行を徹底して実践される庭野開祖にとって、世界平和の活動や宗教協力は、目の前にいるたった一人の仏性を拝むことと全く違いがありませんでした。そして、すべての人を拝む常不軽菩薩の仏性礼拝行を完成させるためにこそ宗教協力があり、世界平和活動があったと思うのです。**

私たちも庭野開祖に倣い、目の前の〝この人〟の仏性礼拝から始めて、すべての人を礼拝することを目標として、平和活動に取り組んでいかなければなりません。

1972 年夏、WCRPⅡへの協力を打診するため、庭野開祖は西ドイツ(当時)に、プロテスタント教会の政府部門代表であるクンスト師を訪ねました。庭野開祖が到着するなりクンスト師は、「あなたは、いったいどういう資格で私たちのところを訪ねてこられたのですか」という鋭い質問をされました。

庭野開祖はこう答えました。**「私はとりたてて資格もなければ、誰に頼まれたわけでもありません。私は久遠実成の本仏のご命令によって、世界の宗教者の方々にお会いしているのです」**そして逆に、クンスト師に質問しました。**「あなたの天にまします神は、あなたに『世界を平和に導くために人々に呼びかけよ』と、そうお命じになられませんか」**

この庭野開祖の言葉に、クンスト師は大きな手を差し伸べて「よく分かった。あなたの言葉をすべて信じましょう」と、手を握りしめたそうです。すべてを生かしている本仏の願いに、常に忠実であろうとする庭野開祖は、宗教の表面的な差にとらわれず、相手の宗教を攻撃するのではなく、認め、称えることによって、万教同根であること、つまり、**「すべてが一法から生じている」**ということを証明して下さいました。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《中国代表の参加を願って》

「世界会議に中国の宗教代表も、ぜひ参加してもらわなければならない」というのが、京都会議の準備を進めている時からの庭野開祖の強い願いだった。しかし、当時の中国は文化大革命のさなかで、中国の宗教者がどんな状態に置かれているかさえ、知りようがなかった。もちろん、宗教者に連絡を取る方法もない。

京都会議が終わったあと、国際会議を開くたびに、**「十億の民をかかえる中国の代表が参加しない会議では、本当の会議とは言えない。何とかして庭野さんが中国に入り、中国の宗教者と話し合ってもらえないか」**と、その役が庭野開祖にまわってきた。そうした折も折、昭和四十九年の春、中国から「中国の実情を見て頂くために、是非、おいで頂きたい」という招待状が届いたのであった。寥承志氏(中国友好協会会長)と、趙樸初師(中国仏教教会会長)からのものだった。趙樸初師は、国民の尊敬を集めている書家で、以前に二度ほど本会を訪ねてこられたことがあった。これもまた、庭野開祖にとってはまたとないお手配だった。

しかし、当時の中国は毛沢東主席の後継者と言われる林彪(りんぴょう)のクーデター騒動があった後で、「批林批孔」(ひりんひこう)の嵐が吹き荒れていた。日中の国交は昭和四十七年に回復していたが、当時は、まだ民間人が自由に中国を訪れることはできなかった。粗相があってはいけないと言うので、庭野開祖は出発前に中国研究の専門家の講義を受けた。すると、「むこうでは、こういうことを言ってはいけない」「この問題にふれてはまずい」というお話ばかりなのである。しかし庭野開祖は、「ここへきての付け焼刃でお上手を言おうとしても、メッキがすぐはげてしまう。それでは中国に行く意味がない。せっかくご招待頂いたのだから、互いに、ありのままの気持ちをざっくばらんに話し合わなくては、私の役目は果たせない」と心に決めていた。

日中航空協定締結直前で、当時はまだ日本から北京への直行便はなかった。一度香港に飛んで列車で光州に入り、光州から北京に飛ぶという回り道だった。北京空港には趙樸初師と、中国友好協会秘書長の孫平化氏が出迎えて下さった。僧侶、宗教関係者はすべて農村で仕事をさせられているという状況の時だったが、北京に入った庭野開祖は、無理にお願いして宗教関係者に集まって頂いた。

宗教施設は破壊されてしまい、中国には宗教者がいなくなってしまったのではないかとさえ思われていたのだが、趙樸初師の努力で、仏教、イスラム教、天主教(カトリック)、プロテスタント、道教の指導者の方々に集まってもらうことができた。取材に来た中国在駐の日本人記者たちが、「まだ中国に宗教者が残っていたんですね」と驚くほどだった。そうして集まって下さった宗教者の方々が口々に話す体験談は、趙樸初師も始めて聞くものだという。皆さんは控えめに話されているのだが、文化大革命によってどれほどの傷を受けたか、その傷の深さがうかがえた。

中国側の歓待ぶりは、もったいないほど至れり尽くせりだった。しかし、庭野開祖についた通訳は、さかんに「孔子の教えはブルジョア階級のためのもの、悪い教えだ」と強調するのである。庭野開祖は彼に尋ねた。「長い中国の歴史の中で教えられ、守られてきた孔子の教えを、急に悪い教えだといって捨てきれるものでしょうか。あなた自身の心にも孔子の教えはしみ込んでいるのではないですか。革命によっても人間の心の中まで切り替えられるものではないと思うのですが・・・」彼はその問いに答えようとはしなかった。

しかしそれから数年後、中国では再び孔子の教えは有用だという見解が発表され、孔子の復権が認められたのである。庭野開祖は中国に行く際、外務省関係者から留意すべき点についてレクチャーを受けたが、それにあまりとらわれることはなかった。とくに中国では台湾のことはまったくの禁句と忠告されたが、庭野開祖は、後のトラブル防止のためも考えて、**「台湾には私たちの大切な信者がたくさんおります。その人たちが求める限り、私たちは今後も台湾に行くであろうことを、前もってお断りしておきます」**と話した。

(つづく)

渉外部からのメッセージ

３月５日の「創立７２周年記念式典」の席上、渡邊恭位理事長から「ＩＳＯ１４００１」の認証取得の発表がありました。宗教界で先駆的に環境保全に取り組む「生長の家」の全面的な協力など各方面から支援を受けての取得だったそうです。産業界では多くの企業が取得していますが、「会社が取得したのだから自分には関係ない」では困ります。一社員の環境への意識がその企業を作ります。宗教団体もきっと同じですね。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。　RKK 京都教会　FAX 075-762-2266